

被災者と災害ボランティアをつなげる 「応援紙」を発行

仙台市

遠藤 智栄 地域社会デザイン・ラボ 代表（プランナー・NPOアドバイザー）

取材日 2011.5.17

地域社会のプランナーとして企業やNPOと協働・連携した事業、地域社会を担うさまざまな人や組織が参画するプロジェクトの支援などに取り組む。震災後は有志による情報交換の場づくりとして始まった「ふっこうカフェ」、仙台市災害ボランティアセンター広報ボランティアチーム、(特活)日本ファシリテーション協会災害復興支援室に関わる。

3月11日 14時46分

地震の時は仙台駅付近の喫茶店で、仕事仲間と原稿作成の打ち合わせをしていた。突然の大きな揺れに驚きながら、揺れが収まるのをその場で待った。店の中では食器が割れ、電気が落ち、女子高生が泣き出し、たまたま出張で仙台に来ていたらしいサラリーマンがパニック状態になっていた。外はアーケードの天井部が落ちてきそうな勢いで、積もっていた塵や埃が白い煙の様に舞っていた。その中を人々が慌ただしく右へ行ったり左へ行ったりしているのを見て店の外に出るのはためらわれた。店内で落ち着くのを待ち、打ち合わせも途中だったが切り上げて仕事仲間と別れ、近くの自宅マンションまで徒歩で帰宅した。途中、地震に驚いて店を飛び出して来たシャンプークロスを着たままのお客さんとハサミを持ったままの美容師さんなど、日常では見られない光景を目にした。自宅へ戻り部屋の中へ入ると、タンスや食器棚、本棚の本が崩れ、中の物は散乱していた。水が出るのを確かめて風呂桶に溜めたが、やがて断水となった。マンションの知り合いの安否を確認し、余震が続いていたので雪の中しばらく建物の外で過ごした。指定避難所である小学校へ行くか、残るかという話になったが、食糧や安全性などを考えると自宅の方が安心できると友人らと判断しマンションに残ることにした。

携帯電話は繋がらず、メールで親戚や知人の安否の確認を行った。すぐに充電が無くなったため充電できる所は無いかと考え、非常用電源がある県庁を思いついた。翌日出かけてみると、既に多くの人達がテーブルタップや充電器を持ち寄り（おそらく勝手に?）充電していた。充電という共通の行為を通じて何となくコミュニティが生まれ、「配給される物資はこっちの方が良かったよ」「あそこのお店は開いているよ」などといった情報の交換の場ともなっていた。「お店が開いてるなら買いに行きたいな」と言うつぶやきに「僕が携帯を見てあげますから買



い物に行ってください」と言ってくれた若者がいて、おかげで買い物をすることができた。マンションに戻ると管理組合で住民の安否確認の手法を検討していた。すでに遠くに避難した人、避難所へ行った人、まだ戻ってきていない人がいて住人全員の安否も所在もわからない。模造紙に階と号室を書きこんだマップを作成して1階ロビーに貼った。そこには安否確認や被害の状況を書き込み、伝言板用の模造紙とペンも用意するなどしてマンションの住人と情報を共有した。

日曜日になり、市内の仕事関係やお世話になった方の所を見て回った。

震災後の生活

以前、宮城県沖地震から30年の年に防災関連シンポジウムのコーディネーターを担った。その時や、地域づくりワークショップなどでは、普段の地域づくりの活動を一緒に顔を合わせて行うことが非常時にも役立つ、と話をしていた。そうしたお話しをするにあたり、自らも自宅対策せねばと基本的な防災グッズは準備していた。今回それはとても役に立った。キャンプをよくやることからターバーナーや乾電池式ランタン、携帯ラジオなどのアウトドアグッズもそ

ろっていて、日々の生活よりは不便だったがお陰で切り抜けることができた。

また、実家の組合で生協と取り引きがあったため、生協へおにぎりの差し入れを行っていた。生協本部へ届けるついでにと実家からの食料を届けてもらえた。おかげで食料の手配に関しては行列に並ぶといったことは少なくて済んだ。

震災で変わったことは？

特に大きく変わったということは無いが、未来をより良くするために提案する活動や仕事をしているので、元通りにするのではなくて震災をバネにして、より良く変えていける機会にできないかと思っている。平常時に変えにくいことも、非常時だからこそ仕組みや、やり方を変えるきっかけにできれば良いと思う。環境の活動にしても「地球温暖化防止のために節電」と言っていた時とは違って、今後の電力不足に備えて節電に参加・実践している人が多い。こういう機会をきちんと捉えて未来をより良く創っていく活動や仕事をしていきたいと考えている。

ふっこうカフェ、災害ボランティア支援活動について

地域づくりに関わっている「東北こんそ」のメンバーリストの中で、復興に向けたワークショップをやりたいという投げかけがあり、賛同したメンバーが集まって検討を行った。まず現状を理解することから始め、過去の経験がある人達の話の聞き、対話と情報交換をしながら次のアクションに反映できるようなことをしようと、現在のスタイルで「ふっこうカフェ」を行っている。何回のカフェをいつまでやろうとは決めておらず、今後の動きを見ながらフレキシブルに動いて行くつもりだ。

仙台市の災害ボランティアセンターのお手伝いもしていて、災害ボランティアに関する人やインターネットを使えない地域の被災者やお年寄りなど、災害ボランティアをお願いしたい人を対象に「応援紙」を発行している。記録を残す観点からも今後役立つだろう。取材していて感じるのは、今回初めてボランティア活動をした方が多いということ。そのため、災害ボランティアセンターはどんなところで、どんな活動をしているのかといった情報の紹介を行っている。編集のためのボランティアメンバー募集から取材・編集・発行までをお手伝いしている。

また、所属している日本ファシリテーション協会では「災害復興支援室」を設置して支援活動を実施している。市民1人ひとりの力やコミュニ

ティの力を活かして、そして、支援されるだけではなく自分たちからいろんなパワーを出して復興を促進していけるような、そんな話し合いの場、取り組みを作ろうとあちこち飛び回っている。

今後の活動

3月の後半から新年度に向け、自治体と「地域の活性化や協働のまちづくり」などで打ち合わせを行う予定があったのだが、津波による影響で事業自体が無くなった。今真っ只中の復興計画作りは自治体により差が出てくるだろう。市民からも声を出していかないと、市民の意見を活かさずいつ決まったの?ということになりかねない。そういった意味では復興計画、まちづくりにどのように市民と企業と行政と、いろんな人が一緒になって取り組んでいけるかということが、そのまちの元気度に関わってくる。こうした動きを応援していきたい。地域づくりや地域の活性化の活動や仕事をしていて、まさに復興とも絡んでくるので、地域のいろんな人たちの力を総動員して活かしていけるようなお手伝いをしていきたい。

2ヶ月を振り返って

全国各地の知人と話をしてみると、支援をしたと考えている人はまだまだたくさんいる。そうした人達の想いをより良く活かして復興していけるいろんな道や方法が、関わっているいろんなところでできてほしいし、自らも創り出していきたい。被災者と支援者の両者が疲弊することなく、WinWinの関係になるように、出会いを大切に継続的な繋がりが生まれるよう取り組んでいきたい。



仙台市災害ボランティア応援紙